

なくなる仕事

11月2日に、「ドコモ ケータイ（iモード）出荷終了について」とNTT DoCoMoのホームページに掲載された。メディアでも報道していた。携帯電話の使用が一定数を確保しているものの、スマートホンの利用へシフトしている。それに伴って、iモードの利用は減ってきているので、それほど話題にはならないが、PHSから携帯電話、そしてスマートホンへと移ってきた世代としては寂しさを覚える。英オックスフォード大学でAI（人工知能）などの研究を行うマイケル・A・オズボーン准教授は、人間が行う仕事の約半分が機械に奪われるという予測をして久しい。

次期学習指導要領の方向性の根底にも、このような社会の変化が想像を超え加速度的に進んできていることとそれに対応する人材育成がある。

私の母親は、若いころ印刷会社に勤め、「ガリ版」を書いていた。結婚退社後も内職で書いていた。私が小学校入学前後、母親は鉄筆でガリガリと原紙に小さな文字を書いていた。それを見ていた私は、小学校入学後、とても小さな文字を書いていたため、担任の先生は心配して、私の母親にこの状況を伝えていた。しかし、昭和50年代にボールペン印刷や複写機などガリ版に変わるものが出現し、母親の技術は使われなくなり、仕事が無くなってしまった。私自身も仕事が無くなることを目の当たりにしたのである。

今日、スチールカメラがデジタルカメラに変わり、レコード盤がCDそしてデータへと変わり、様々な技術（仕事）が衰退している。反面、スチールカメラやレコード盤、機械式時計などの根強い愛好家が存在することで、細々ながら需要があり、技術者の需要が高まってきている。仕事が無くなることへの不安があるとともに、その裏には生活の便利さが存在し、また、レトロへの懐古があり、暗いイメージばかりとは言えない。社会や人類の歴史はこの連続であったのだろう。

文部科学省は次期学習指導要領の方向性について口頭説明で、仕事が無くなることへの不安だけを考えるのではなく、解決が難しい様々な課題へ対応できる人材育成をあげている。比較的变化が少ない仕事に就いている方や教育に携わるものは、急激な変化に不安を持つかもしれないが、歴史や現在の様子を見ると常に変化の連続であると思う。企業や事業者は変化を予想し、その準備をし、時代に乗り遅れず対応していることが多いと理解している。むしろ、この変化への対応が、革新を起こし、成長を促しているのである。

「新人類」と言われてきた我々世代、そして今の若者たち。柔軟な志向とともに上手に変化へ対応していくものと私は楽観的に考えている。

そのためには、新しい教育内容や教育方法とともに、ヒトの能力を高める基礎的（あえて基本的より基礎的）な力をしっかり身につけていくことが大切であろう。どんなに素晴らしいアスリートでも、毎日の基本を確実に繰り返す練習があってこそ高度な技が可能になるのである。

私はどんなに生きながらえたとしても、あと30～40年。この後どんな世の中にあるか、これからの若者に期待し楽しみにしていきたいと考えている。